

「杜甫嚴武反目説話」の構造

前言

嚴武は、成都期の杜甫の第一の支援者だった。特に嚴武が二度目に成都に劍南節度使として赴任したときには、杜甫を自らの幕府に幕僚（節度參謀）として招き、また朝廷に奏請して杜甫を檢校工部員外郎とした。杜甫は嚴武に贈った詩を、三十數首のこしている。それは杜甫が友人を詠み込んだ詩としては最多の數であり（李白一五首・高適一七首）、それ自體が兩者の親密な交際を裏付ける證據である。

しかしながら、杜甫と嚴武の間には深刻な反目があったとする記事が、早くは中唐の李肇『唐國史補』に出現し、唐末の范攄『雲溪友議』、五代の王定保『唐摭言』と繼承され、『舊唐書』『新唐書』の二つの正史も、その影響下に撰述され

松 原 朗

ることになる。この反目説話は、宋代以降の杜甫評價の高まりの中で次第に閑却され、正面から問題にされる機會は殆ど無くなっていた。しかし最近になって、兩者の反目の存在を肯定し、その反目を前提として、當時の杜甫の文學を理解しようとする論者も現れている。⁽¹⁾

本稿では、この杜甫嚴武反目説話（以下、反目説話）の構造を分析することによって、この説話が如何なる意圖の下に形成されたのか、また杜甫評價と如何に關わるのかを考察しようとするものである。

なおここにいる説話とは、「傳承譚：傳承に由來する首尾を備えた物語」という意味であり、それが事實の記録か、虚構の産物であるかはさしあたり問わないものとする。説話には、その物語を構成する「話材」と、その話材をつなぎ合わせる

「論理」が備わっている。従って、個々の話材の選擇と、それをつなぎ合わせる論理を吟味することによって、「事實か虚構か」の不毛な議論を回避しながら、その説話が何を背景とし、また何を主張するものかを考察することができらう。しかもこうして解明される説話流行の経緯こそが、杜甫評價史論の観點では、「事實か虚構か」の判定にもまして、むしろ本質的な意味を持つものである。

一 説話の實態

杜甫と嚴武の確執に言及する記事はすでに中唐以降の筆記に散見されており、『舊唐書』『杜甫傳』を経て、最終的には『新唐書』『杜甫傳』に記録されることによって、後世への影響は決定的なものになった。その『新唐書』の当該部分を、左に引用する。

（杜甫）流落劍南、結廬成都西郭。召補京兆功曹參軍、不至。會嚴武節度劍南東西川、往依焉。武再帥劍南、表爲參謀檢校工部員外郎。武以世舊待甫甚善、親至其家。甫見之、或時不巾。而性褊躁傲誕、嘗醉登武牀、瞪視曰「嚴挺之乃有此兒」。武亦暴猛、外若不爲忤、中銜之。一

〔杜甫嚴武反目説話〕の構造（松原）

日欲殺甫及梓州刺史章彝。集吏於門。武將出、冠鉤于簾三、左右白其母、奔救得止、獨殺彝。

杜甫が嚴武に對して、酒席で「嚴挺之にはお前のような不肖の子がいたのか」という挑發的言動に及んだこと、このことを銜んだ嚴武は、杜甫の殺害を企てたが失敗し、梓州刺史の章彝だけを殺したことが述べられている。

ところでこの『新唐書』の記載は、多くの材料を中唐から五代にかけての小説から得たものである。次に煩を厭わずに掲げよう。

①『唐國史補』卷上 目次の標題：「母喜嚴武死」

嚴武少以強俊知名。蜀中坐衙、杜甫袒跣登其机案。武愛其才、終不害。然與章彝素善、再入蜀、談笑殺之。及卒、母喜曰、而今而後、吾知免官婢矣。

②『雲溪友議』上・嚴黃門（十二卷本にはこの標題は無い）

武后朝嚴安之・挺之、昆弟也。（嚴）安之爲長安戎曹、權過京尹、至今爲寮者願得安之之術焉。（嚴）挺之則登歷臺省、亦有時名。娶裴卿之女、纔三夕、其妻夢一人佩服金紫美鬚鬢、曰「諸葛亮也。來爲夫人兒」。既妊而產嬰孩。其狀端偉、頗異

常流。挺之薄其妻、而愛其子。嚴武年八歲、詢其母曰「大人常厚玄英（玄英挺之妾也）、未常慰省阿母。何至於斯乎」。母曰「吾與汝母子也、以汝尚幼、未之知也。汝父薄幸、嫌吾寢陋、枕席數宵、遂卽懷汝。自後、相棄如離婦焉」。其母悽咽。武亦憤惋難處。候父既出、玄英方睡、武持小鐵鎚擊碎其首。及挺之歸、驚愕視之、已斃矣。左右曰、小郎君戲運鐵鎚而致之。挺之呼武至、曰「汝何戲之甚耶」。武曰「焉有大朝人士、厚其侍妾、困辱兒之母乎。故須擊殺、非戲之也」。父曰「眞嚴挺之子」。而每抑遏恐其非器。武年二十三爲給事黃門侍郎。明年擁旆西蜀、累於飲筵對客、聘其筆札。杜甫拾遺、乘醉而言曰「不謂、嚴挺之有此兒也」。武恚目久之。曰「杜審言孫子、擬捋虎鬚」。合座皆笑以彌縫之。武曰「與公等飲饌謀歡、何至於祖考耶」。房太尉綰亦微有所忤、憂怖成疾。武母恐害賢良、遂以小舟送甫下峽。母則可謂賢也。然二公幾不免於虎口矣。李太白爲「蜀道難」、乃爲房杜之危也。其畧曰「劍閣崢嶸而崔嵬、一夫當門萬夫莫開。所守或非人、化爲狼與豺、朝避猛虎、夕避長蛇。磨牙吮血、殺人如麻。錦城雖云樂、不如早還家。蜀道之難、難於上青天。側身西望長咨嗟」。杜初自作閬中行、「豺狼當路、無地遊從」。或謂、章仇大夫兼瓊、爲陳拾遺雪獄、高適侍御、與王江寧昌齡申冤、當時同爲義士也。李翰林作此

歌、朝右聞之、疑嚴武有劉焉之志。支屬刺史章彝、因小瑕、武遂杖殺之。後爲彝外家報怨、嚴氏遂微焉。

③『唐摭言』卷十二「酒失」

杜工部在蜀、醉後登嚴武之牀、厲聲問武曰「公是嚴挺之子乎」。武色變。甫復曰、「僕乃杜審言兒」。于是少解。

④『舊唐書』卷一九〇下「杜甫傳」

上元二年冬黃門侍郎鄭國公嚴武鎮成都。奏爲節度參謀檢校尚書工部員外郎、賜緋魚袋。武與甫世舊、待遇甚隆。甫性褊躁、無器度。恃恩放恣、嘗憑醉登武之牀、瞪視武曰、「嚴挺之乃有此兒」。武雖急暴、不以爲忤。甫於成都浣花里、種竹植樹、結廬枕江、縱酒嘯詠、與田夫野老相狎、蕩無拘檢。嚴武過之、有時不冠、其傲誕如此。永泰元年夏、武卒。甫無所依。及郭英父代武鎮成都。英父武人、粗暴無能刺謁、乃遊東蜀依高適。既至而適卒。是歲、崔寧殺英父、楊子琳攻西川、蜀中大亂。甫以其家避亂荊楚、扁舟下峽。

上記の資料を見て了解されることは、第一にこの反目説話は、當初から最終的な形（假に『新唐書』杜甫傳）を整えていたものではなく、幾つかの話材を追加しながら次第に形成されたことである。このことは、反目説話が事實の記録そのもの

ではなく、假に事實の核があつたとしても、多くの虚構を含み込んだものであることを窺わせる。

第二に、唐末に成立した范攄『雲溪友議』が、この説話形成の過程にあつて重要な位置を占めることである。元和時期前後に成立した李肇『唐國史補』は、分量は貧弱であり、説話としての筋立ても單純である。『唐國史補』の内容を取り込みながら、外形的にその數倍の分量を持つに至つた『雲溪友議』が、説話として飛躍的に成熟した段階にあることは一目瞭然であろう。

本稿では、行論の便宜上、この『雲溪友議』を中心に据えて、反目説話がどのような構造を持ち、何を主題とするのかを考察することにした。

二 『雲溪友議』反目説話の正體

『雲溪友議』の記す説話は、杜甫と嚴武の反目記事を一つの話材として含みつつ、さらに多くの話材から成る複合體であり、それら話材の有機的配列を通して「一つの主題」を語るものである。この説話の主題を知る上でまず注目すべきは、その標題である。そもそも標題が「嚴黃門」であることは、これが杜甫ではなく、嚴武を物語る説話であることを示して

いる。事實この説話は、嚴武の誕生以前に始まつて、その死後に及んで終るものであり、その全體を貫くのは嚴武その人である。

第一段：伯父の嚴安之と父親の嚴挺之の經歷から説き始め、嚴挺之と裴卿の娘（嚴武の母親）との婚姻、そして嚴武の懷妊譚を記す。結婚三日目の夜、夢に妾の立派な男が現れ、「自分は諸葛亮だが、お前の子として生まれ變わる」と告げる。こうして生まれた嚴武は、能力と風采に恵まれ、父親の愛情を受ける。

第二段：八歳の時、父親嚴挺之が妾の玄英ばかりを寵愛して母親を大事にしないのを苦にした嚴武は、父親の不在を狙つて玄英を鐵槌で殴り殺す。歸宅した父親は嚴武の暴行を咎めるが、嚴武は「朝廷の大官が、妾を厚遇して、私の母親を侮辱して良いのですか」と抗弁する。父親は「さすがは我が子だ」と言つてはみたが、「非器」（器量に欠ける人間）ではないかと息子の將來を不安に思つた。

第三段：杜甫嚴武反目説話の部分。嚴武は黃門侍郎になつた翌年、蜀に赴任するが、そこでは頻りに宴會を催して、詩文の遊びに耽溺した。杜甫は酔つた勢いで擲擲した、「嚴挺之

にこのような不肖の息子がいたのか」。嚴武は杜甫を睨みつけると「杜審言の孫は虎の鬚を掴んだな」と切り返した。座にあつた者は作り笑いでその場を取り繕つた。嚴武はいった。「諸君と楽しく宴會を開いているときに、祖父や父親のことまであげつらう必要は無かつた」。——房瑄は嚴武の不興を買い、不安のあまり病氣になつた。母親は、嚴武が「賢良」な人物を殺害するのを恐れて、杜甫を小舟で逃がして三峽を下らせた。母親は賢い人で、そのおかげで杜甫と房瑄は嚴武の虎口を免れることが出来た。李白は二人のために樂府「蜀道難」を作つたが、それを讀んで朝廷の人士は、嚴武には杜甫と房瑄を殺す底意のあることを察知した。

第四段：嚴武の配下で東川節度使の章彝は、些細な罪によつて嚴武に杖殺された。その後、章彝の妻方からの復讐を受けて、嚴武の家は没落した。

説話の第一段は、一族（伯父と父親）の榮達を語り、また名族の出である母親は、諸葛亮を夢に見つつ諸葛亮の生まれ變わりの子を懷妊したと語る、いわば典型的な貴種生誕説話となつてゐる。

一方、これに續く第二段・第三段・第四段は、嚴武の非情

なる性格を、それぞれ少年時期と壯年時期の挿話を通して語る。すなわち第二段では、母親の敵である父親の愛妾・玄英を撲殺したこと、第三段では、官界の恩人である房瑄と、友人である杜甫を迫害したこと、第四段では、部下で東川節度使留後の大官にあつた章彝を些細な理由で杖殺し、最後には、章彝の一族の恨みを買つて嚴武の家が没落することを物語る。——しかもここで注意すべきは、説話の編者がこれらの事件を個別に羅列して語るのではなく、一人の母親の目を通して、「二連のもの」として構成したことであらう。母親は、特別の子として嚴武を産み落とした。その子は、母親の愛に報いるために第一の殺人を犯し、成人の後は母親を心配させるほどに驕暴な性格を募らせ、最後には母親の心配も空しく自滅してゆく。

ここに現れる嚴武は、自分の信念とあれば周囲への配慮を忘れて事を強行する直情の人物であり、恰もそれは父親嚴挺之が「非器」であることを危惧したとおりの、殘忍で矯激な性格の持ち主だった。この説話は、母の目を定點としてそこから「嚴武の暴虐な人と爲りを物語る」ものであり、その一つの主題を語るために、複数の話材が有機的に配列されたものなのである*。

* この説話が嚴武に批判的な視點で編集されていることを考慮するならば、嚴武を令名高き蜀相諸葛亮の生まれ變わりとする生誕説話の解釋が問題となる。この點について恐らくは、嚴武が蜀における對吐蕃戰に大功を建てたこと、また最後は蜀で没したことの伏線を張つたものなのであろう。

こうした大局的理解に立つならば、この説話が杜甫を主人公とするものでもなく、またもとより杜甫の嚴武との反目を主題とするものでもないことは明白である。事實、反目説話の初出である李肇『唐國史補』においても、標題は「母喜嚴武死」であり、やはり嚴武を主人公とするものであった。すなわち杜甫と嚴武の反目は、當初、嚴武の偏頗な性格を描き出す一つの話材として嚴武説話の中に出現したものであり、『雲溪友議』は、『唐國史補』説話が敷いた主題に沿つて、それを忠實に敷衍發展させたものなのである。

三 嚴武の暴虐を語る説話「嚴武盜妾」

嚴武は、死後に逸話を語られることの多い人物だった。『雲溪友議』は、唐末の時點におけるその逸話の集大成の觀があるが、しかしこれに漏れたものもある。次に掲げる盧肇『逸史』（『太平廣記』卷一三〇「報應二十九」所引）の説話も、その

一つである。

唐西川節度使嚴武、少時仗氣任俠。嘗於京城、與一軍使鄰居。軍使有室女、容色艷絕。嚴公因窺見之、乃賂其左右、誘至宅。月餘、遂竊以逃。東出關、將匿於淮泗間。軍使既覺、且窮其跡、亦訊其家人。乃暴於官司、亦以狀上聞。有詔、遣萬年縣捕賊官專往捕捉。捕賊乘遞、日行數驛、隨路已得其蹤矣。嚴武自鞏縣方雇船而下、聞制使將至、懼不免。乃以酒飲軍使之女、中夜乘其醉、解琵琶弦縊殺之、沈於河。明日制使至、搜捕嚴公之船、無跡、乃已。

大意を取れば——青年の嚴武は、長安で見つけた軍使の美しい娘を誘拐し、淮泗のあたりまで連れ出した。しかし軍使の告訴により官憲が捜査に乗り出したのを知り、事の發覺を恐れた嚴武は、娘を琵琶の弦で絞め殺し、死體を川に沈めた。翌日嚴武の船は搜索されたが、娘の姿がないので沙汰止みとなった。

説話の後半は、以下のような後日談を記す。劍南節度使となった嚴武が、病氣になった。一人の巫祝が嚴武の前に現れ

て、お前には亡靈が憑依している、過去にどのような悪事をはたらいたかと問い質す。嚴武は無視して取り合わない。巫祝はさらに問い詰める、その亡靈は十七八歳の娘で、首には樂器の弦が絡み付いている、それでもまだ知らないのか。ここに至つて嚴武は總てを白狀して懺悔し、巫祝に亡靈の鎮魂を懇願した。しかし亡靈は巫祝の取りなしを聞き入れず、嚴武はその日の夜に亡靈の祟りで死んだ。――

ここに描かれた暴虐性は、少年嚴武の「父の愛妾撲殺」説話と一脈通ずるものがある。もつとも撲殺説話には、父親の不實を憤る嚴武の義侠心を讀み取る善意の解釋も成り立つが、この「嚴武盜妾」説話に至つては、嚴武は單なる凶惡で粗暴な殺人者でしかない。

この「嚴武盜妾」は荒唐無稽な内容であり、明らかに虚構の産物と見るべきものである。しかしここで重要なことは、嚴武のこのような暴虐を語る説話が『雲溪友議』以外にも複数行われていたということの事實である。すなわち、この「嚴武盜妾」説話の典故は盧肇『逸史』であり、それが成立した大中元年（八四七）の時点で、嚴武をもつて驕暴な人間と見る認識が士人社會に幅廣く共有されていたと考えて相違なからう。

四 嚴挺之と杜審言

反目説話の初出である李肇『唐國史補』「母喜嚴武死」では、杜甫の嚴武に對する挑發は、單に嚴武の机案に袒跣の不謹慎な姿で攀じ登つた（杜甫袒跣登其机案）とやうに止まり、それが何を意味するのかは不明である。しかしこれを承ける『雲溪友議』では、

杜甫拾遺、乘醉而言曰「不謂、嚴挺之有此兒也」。武悲目久之。曰「杜審言孫子擬捋虎鬚」。合座皆笑以彌縫之。武曰「與公等飲饌謀歡、何至於祖考耶」。

「嚴挺之には、お前のような不肖の息子がいたのか」という明確な侮辱の言となる。

それにしても嚴武に對する批判が、何故、あえて嚴挺之に及ぶ必要があつたのかが問題とならう。多分その理由の第一は、杜甫は、嚴武とその父親嚴挺之の二世代に亘つて交友を持つ、いわゆる世交の關係にあるためであり、また第二に、先人の徳を稱揚することを子孫の責務とする中國の思想的風土の中では、「不肖」の行爲を指彈することは最も効果的な侮辱となるためである。一方、これに對する嚴武の返答「杜審言の孫は虎の鬚を捫んだな」も、初唐の名詩人で、杜甫が崇

敬してやまない杜審言⁽²⁾を引き合いに出して杜甫の不肖を挙げつらうもので、全く同趣の發言となつてゐることも注意されて良い。ここには偶然を超えた、説話編者の計算があると思つてよからう。

もつともこうした一般理由だけでは、二人が何故あえて互いに先人を挙げつらうのか、その深層の動機を明らかにすることはできない。恐らくここで肝心な意味を持つのは、嚴挺之や杜審言を名指すことで直ちに想起される、過去のある事件である。すなわち嚴挺之については、嚴武による父嚴挺之の愛妾撲殺事件である。説話の物語手にすれば、嚴挺之を名指すことで、嚴武の過去にまつわるおぞましい殺人の記憶を、いとも容易に呼び起こすことが出来るのである。

一方、杜甫に關してあえて杜審言を言挙げするのも、杜審言の名と共に、皆が周知のあの一つの事件を想起させることができるからである。

(杜審言) 累轉洛陽丞。坐事貶授吉州司戶參軍、又與州僚不協、司馬周季重與員外司戶郭若訥共構審言罪狀、繫獄、將因事殺之。既而季重等府中酣讌、審言子幷年十三、懷刃以擊之、季重中傷死、而幷亦爲左右所殺。季重臨死

〔杜甫嚴武反目説話〕の構造（松原）

曰「吾不知審言有孝子、郭若訥誤我至此」。審言因此免官、還東都、自爲文祭幷、士友咸哀幷孝烈、蘇頲爲墓誌、劉允濟爲祭文。〔舊唐書〕一九〇上「杜審言傳」。〔新唐書〕もほぼ同じ)

杜審言は、左遷された吉州において周季重らの讒言にあつて投獄され、殺されそうになつた。この時杜幷は、忍ばせた懷刀をもつて周季重を刺殺した。杜幷はその場で殺されたが、父親の無念を晴らすために自らを犠牲に供したこの行爲は時人の共感を贏ち得て、孝子の典型として稱賛された。文壇の重鎮である蘇頲は墓誌を作り、劉允濟は祭文を作つたと、兩『唐書』には記されている。⁽³⁾

なるほど嚴武の場合（無論その撲殺事件が事實であつたとした場合だが）は、家庭の中の、父親嚴挺之の正妻と妾とに對する恩愛問題という閉じた世界にあるために、嚴武の憤慨は社會的な贊美を贏ち取る「義舉」へと昇華されることはなかつた。しかし兩者にはそのような相違があるにせよ、杜幷と嚴武の、仇敵に對する問答無用の直情的殺害は、いずれも深謀遠慮の對極に位置するものであり、その限りでは軌を一にするものである。

嚴武暴虐説話の物語手である范攄が、なぜ杜甫をして嚴挺之の名を言わせ、これに應ずる嚴武の口から杜審言を語らせたのかは、こうした論理の脈絡にそつて理解されるべきだろう。嚴武の暴虐ぶりを強調するには、熱血漢の杜甫を伯父に持つ杜甫を當てて、兩者にあからさまな衝突劇を演じさせるのが効果的だったからである。——こうして杜甫嚴武反目説話は、嚴武の暴虐を語る説話全體の中に、有機的に組み込まれていることが確認されるのである。

五 説話の読み替え

以上に明らかにされたように、嚴武の暴虐なる人と爲りを語る説話は、元和時期の李肇『唐國史補』に濫觴し、その後、唐末の『雲溪友議』に至つて、様々な話材を集めて一つの完成に達した。⁴

しかし五代の時期になると、それが杜甫を語る説話として、改めて読み替えられることになる。その端緒は、王定保『唐摭言』（卷十二「酒失」）である。

杜工部在蜀、醉後登嚴武之牀、厲聲問武曰「公是嚴挺之子乎」。武色變。甫復曰、「僕乃杜審言兒」。于是少解。

この一段が嚴武ではなく、杜甫を主人公とすることは、標

題が「酒失」（杜甫の酒の失敗）であることによつて、また本文が話題を「杜工部」として始まっていることから⁵も明らかである。しかも『唐摭言』の直後に編纂された劉昫『舊唐書』が、やはりこの反目説話を「杜甫傳」の中に取り込んでいることも看過されてはならない。従来は嚴武説話の一部としてあつた反目説話が、この五代の時期を境に遽かに、杜甫を語る説話として読み直され始めたことを裏付けるものである。

反目説話が、嚴武ではなく、改めて杜甫を主人公として読み直されたとき、杜甫の評価にも變化が生ずるのは必然の勢いである。むしろ嚴密を期するならば、杜甫評價の變更そのものを企圖して、主人公の読み替えが行われたと考えるのが、より妥當な判断となるだろう。ではいったい杜甫評價にどのような變化が生じたのか、その評價の推移を端的に示すのが、『唐摭言』の「酒失」という標題である。そこでは杜甫は單なる酒亂として貶められ、兩者の反目の責任は、嚴武ではなく、専ら杜甫にあるものと解釋されることになる。

總じて説話の読み直しによつて、このような杜甫の評価の下落が進行する。その具體相を、『舊唐書』と『雲溪友議』との比較を通して確認することにした。

武與甫世舊、待遇甚隆。甫性褊躁、無器度。恃恩放恣、

嘗憑醉登武之牀、瞪視武曰、「嚴挺之乃有此兒」。武雖急暴、不以爲忤。……（杜甫）蕩、無拘檢、嚴武過之、有時不冠、其傲誕如此。

この『舊唐書』『杜甫傳』の記載には、「性褊躁」「無器度」「恃恩放恣」「蕩無拘檢」「傲誕」等、杜甫の人格を毀貶する評語が大量に用いられている。杜甫はこのような劣等な人格の持ち主であるから、必然、尊者で恩人である嚴武に對しても無禮な振る舞いに及んだという筋書を作るのである。——これに對して嚴武は、良識と度量の持ち主として描かれる。「武與甫世舊、待遇甚隆」、嚴武は父親の代からの友人である杜甫を、鄭重に待遇した。そして酒席で杜甫が無禮な振る舞いに及んだ時にも、「不以爲忤」、あえて杜甫を咎めることはなかった。『舊唐書』の編者は兩者の評價において、杜甫を抑え、嚴武を揚げる態度を鮮明にしている。

この杜甫像と對照するとき、『雲溪友議』の杜甫は、明らかに別人格者である。杜甫は「賢良」なる人物を演じており、もとより杜甫に對しては貶辭の一つも見ることには出来ない。

明年擁旆西蜀、累於飲筵對客、聘其筆札。杜甫拾遺、乘醉而言曰「不謂、嚴挺之有此兒也」。武恚目久之。曰「杜審言孫子擬捋虎鬚」。合座皆笑以彌縫之。武曰「與公

〔杜甫嚴武反目說話〕の構造（松原）

等飲饌謀歡、何至於祖考耶」。房太尉綰亦微有所忤、憂怖成疾。武母恐害賢良、遂以小舟送甫下峽。

一方、嚴武は専ら驕暴な獨裁者として登場し、嚴武の母親は、賢明で善良な人間である杜甫を嚴武の殺害から守るために、小舟に乗せて逃がすのである。そもそも『雲溪友議』の說話は、嚴武を「非器」なる者と見做し、その驕暴なる性格を描くことを主題とするものであった。その說話の中では、杜甫が、嚴武の負の性格を際立たせるために「賢良」なる人間を演ずるのは、必然の要請なのである。（但し『雲溪友議』においても、杜甫の一面としてある矯激性・直言を憚らぬ剛毅な氣質は否定されていない。）

ここで見過しえないのは、杜甫と嚴武の反目の切っ掛けとなる、その直前の文脈であらう。酒に酔った杜甫が、嚴武に向かつて「嚴挺之にこのような不肖の子がいたのか！」という罵聲を浴びせる點では兩者とも同じであるが、何がその發言を導くかによって、發言の眞意が大きく異なることになる。

『舊唐書』では、「嚴武は世交の好誼のゆえに、杜甫を鄭重に待遇した。それにも拘わらず、杜甫は性格が褊躁で、人間の器量が小さく、嚴武の溫情を頼んで勝手な振る舞いが目立ち（武與甫世舊、待遇甚隆。甫性褊躁、無器度。恃恩放恣）

……」と述べる。つまり嚴武の厚意を無視して、杜甫は驕慢に振舞い、舉げ句の果てには恩人である嚴武を侮辱した。かくして反目の責任は、舉げて杜甫が負うべきものとされるのである。

これに對して『雲溪友議』では、杜甫は「賢良」なる人物であり、暴虐なる嚴武の被害者として登場する。「嚴武は成都に節度使として赴任すると、頻りに宴會を催して、詩文の遊びに耽溺した（擁旄西蜀、累於飲筵對客、聘其筆札）。杜甫は（これを快く思わず）……」と述べる。これを承けての杜甫の發言は、劍南節度使嚴武の惡政に對する眞つ當な批判の言辭として、肯定的に位置づけられている*。

* 「累於飲筵對客、聘其筆札」は、「累於（〜）に辟易する」の文言によつて、嚴武の頻繁な文宴の開催に對して負の評價を示すものである。なお嚴武の蜀中統治が、苛斂誅求を事とする「暴政」であつたことは、史書が記す。嚴武は吐蕃外征の祝勝記念に巨費を投じて、頻繁に盛大な文宴を開催したとされるが、それは『雲溪友議』が傳える「累於飲筵對客、聘其筆札」と對應關係にあるだろう。⁽⁸⁾ こうした史書の文脈に従えば、『雲溪友議』説話における杜甫の嚴武批判は、單に盛大な文宴への耽溺を揶揄するばかりではなく、その背景にある苛斂誅求を指彈したも

のと理解することもできよう。

しかも『雲溪友議』は、このように杜甫を揚げ、嚴武を抑える論調を展開した上で、さらに嚴武の暴虐を伝える二つの記事を追加している。第一は、房琯への迫害である。「房太尉綽亦微有所忤、憂怖成疾」。肅宗朝において、嚴武は房琯黨の一員であり、房琯の推挽によつて高官に登つた。その恩人房琯（當時左遷されて、嚴武の劍南節度使管轄下の漢州刺史に在任）を、嚴武は威嚇したとするのである。

第二は、李白「蜀道難」の獨自の解釋であり、李白はこの詩を、嚴武の迫害から杜甫と房琯を救うために作つたと認定する。——「蜀道難」を嚴武との關係で解釋するのはこの『雲溪友議』を初出とする。李白の「蜀道難」は、天寶の初年に長安に出てきた李白が、當時の文壇の重鎮であつた賀知章に見せて絶賛されたというのが眞相であり、それは成都での杜甫と嚴武の出會いの約二十年以前である。従つて『雲溪友議』のこの解釋は、成り立たない。それにも拘わらず『雲溪友議』説話が「蜀道難」を嚴武に繋けて解釋するのは、嚴武を驕暴なる加害者に仕立てるために強いて「材料」を探し求めた結果と理解すべきであろう。

『雲溪友議』説話が、嚴武を主人公とし、嚴武の暴虐を努め

て物語ろうとする説話であることは、以上の分析から重ねて確認されたことになる。⁽⁹⁾ 杜甫はそこでは脇役に過ぎず、房琯と共に嚴武に迫害される「賢良」として、嚴武の暴虐を際立たせるために登場する。この『雲溪友議』の杜甫が、五代の時期に『舊唐書』が新たに提示した否定的な杜甫像と大きな徑庭を持つことは、明白としなければならない。

結 語

五代から北宋にかけて、杜甫嚴武反目説話が、當初の嚴武を主人公とする説話から、杜甫の説話へと読み替えられたこと、またこれに従って杜甫の人格評價に下落が起こったことが確認されたであろう。

最後に、この時期にかかる變化が生じたことの原因について、簡単な推測を述べることにしたい。

説話の読み替えによる杜甫評價の下落の深層にあつては、逆説的ではあるが、却って杜甫評價の高まりが進行していたことを想像しても良からう。説話が大方の歓迎を受けるためには、人々の関心を惹きつける話題性が必要ならぬ。五代時期になると、もはや嚴武ではなく、杜甫を主人公に据えた方が、より大きな話題性を獲得する環境が整えられてい

たのである。嚴武のいかなる驕暴な所行も、所詮は過去のものに過ぎない。しかし杜甫の文學が読み繼がれつつあるのは、五代の當時の儼然たる事實である。杜甫の文學が讀まれ、かつ評價を高めるところでは、杜甫の人物について語る説話は、多くの人々の関心を惹くことができるのである。假に、杜甫の文學が全く忘れ去られた状況を想定するならば、こうした説話がほぼ確實に流布の根據を失うであろうことは、想像に難くない。しかし、杜甫を主人公とする説話の読み替えは、正に、杜甫評價の高まりと對應するものに相違ないのである。その時、なぜ杜甫嚴武反目説話は、杜甫評價の下落という方向を取ったのかが問題となるだろう。一級文學ではないゆえに無責任な讀みが許容される説話では、讀者の低次元の興味が優先されることもある。杜甫が「挺節無所汙」「傷時憊弱」「情不忘君」(『新唐書』杜甫傳)の杜甫評」という儒教倫理の價值觀に向かうべく次第に評價を高めつつある趨勢の中では、杜甫の非倫理的側面を強調する説話は、内容が「不謹慎」であるだけに、却って恰好の話題性を持ち得たものと思われる。しかし最終的には北宋中期の王安石・蘇軾らによつて杜甫の評價と權威が確立されるに及んで、杜甫を貶める反目説話はやがて壓迫されて、正面の議論から排除されることになる。⁽¹⁰⁾

杜甫評價が上昇する趨勢の中にあつて、しかもまだ杜甫の評價が確立していない五代から北宋中期の一時期だからこそ、杜甫を主人公とし、杜甫の人格を貶めるような杜甫嚴武反目説話が流行し得たということになるだろう。

注

- (1) 拙稿「杜甫嚴武反目説話」の消長」〔松浦友久博士追悼記念中國古典文學論集〕研文出版、二〇〇六年）を参照。
- (2) 「進鵬賦表」に「自先君（杜）恕・（杜）預以降、奉儒守官、未墜素業矣。亡祖故尚書膳部員外郎先臣審言、修文於中宗之朝、高視於藏書之府、故天下學士到於今而師之。臣幸賴先臣緒業、自七歲所綴詩筆、向四十載矣。約千有餘篇」。
- (3) 羅振玉『芒洛冢墓遺文・續補輯』に「大周故京兆男子杜并墓誌銘并序」があり、撰者の姓名がないが劉允濟の所作と推定される。『唐才子傳校箋』第一冊七一頁参照。
- (4) ここに未收のものに、前述の盧肇『逸史』（大中元年成書）の「嚴武盜妾」がある。『雲溪友議』卷中「錢塘論」には盧肇について「（張）祐復遊甘露寺、觀前盧肇先輩題處、云々」という記事もあり、范攄が盧肇の著書『逸史』の内容を知つてた可能性は高い。それにもかかわらず『雲溪友議』の嚴武説話がこれを引用しないのは、その内容が誕妄で、嚴挺之・杜審言・房瑄・章彝・李白らを語る「正經」を装つた文脈と齟齬するため

であろう。

- (5) 『唐國史補』『雲溪友議』の冒頭が「嚴武」であるのは、それが嚴武を主題とする文章であることと對應する。
- (6) 『新唐書』杜甫傳は「武以世舊、待甫甚善、親入其家。甫見之、或不時巾、而性褊躁傲誕」。
- (7) 『舊唐書』嚴武傳に「前後在蜀累年、肆志逞欲、恣行猛政。……蜀士頗饒珍產、武窮極奢靡、賞賜無度、或由一言賞至百萬。蜀方閭里以微斂殆至匱竭」。『新唐書』嚴武傳に「武在蜀頗放肆、用度無藝、或一言之悅、賞至百萬。蜀雖號富饒、而峻陪亟斂、閭里爲空」。嚴武の奢侈濫費は、武將の崔寧（崔旰）が吐蕃外征から凱旋した後に、祝賀褒美の名目で肥大化した。『冊府元龜』卷三五九に「廣德中、吐蕃與諸雜羌戎寇陷西山、拓靜諸州。詔劍南節度使嚴武收復。武急召（崔）寧、統兵出西山。……蕃衆相語曰、崔旰皆神兵也。將更前進、以糧盡還師。武大悅、裝七寶輿迎寧入成都、以誇士衆、賞賚過厚」。
- (8) 吐蕃外征が成功した後に、嚴武が盛んに宴會を催し、杜甫もその宴會に参加して詩の唱和をしたことは、杜甫の詩からも確認できる。
- (9) 『雲溪友議』の嚴武説話は、當初は、惡人嚴武を主人公とする因果應報譚として構想された可能性が高い。嚴武の母親が、嚴武の惡行に坐して官婢とされることを危惧することや、嚴武の家が、章彝一族の恨みを買つて没落するのを記すのは、その證左となる。また盧肇『逸史』の「嚴武盜妾」も『太平廣記』卷一三〇の「報應二十九」の所引であるように、因果應報譚で

ある。晩唐期に嚴武は、悪事は悪果によって報いられるという因果應報譚の恰好の主人公となっていた可能性があるだろう。(10) この『新唐書』成書前後の状況については、注(1)所掲の拙稿を参照。

【附記】

『新唐書』「杜甫傳」の記す反目説話には、李肇『唐國史補』・范攄『雲溪友議』・王定保『唐摭言』・『舊唐書』には含まれない獨自の記載がある。「瞻視曰、嚴挺之乃有此兒。武亦暴猛、外若不爲忤、中衡之」(嚴武も獍猛であり、腹を立てない振りはしたが、心中では恨みを抱いた)。「新唐書」ではさらにこれを承けて「一日欲殺甫及梓州刺史章彝……」と續くが、「外若不爲忤、中衡之」の文言はその導入をなす重要な部分である。

洪邁『容齋隨筆』續筆卷六に「舊史但云、甫性褊躁、嘗憑醉登武牀、斥其父名。武不以爲忤。初無所謂欲殺之説。盖唐小説所載、而新書以爲然」と述べて、『舊唐書』になく、『新唐書』が記す嚴武の杜甫殺害企圖は、信憑性のない唐小説を繼承したものだ、と批判する。その「唐小説」が指すものは『太平廣記』卷二六五「輕薄一・杜甫」であらう。『新唐書』と『太平廣記』所引の説話は、「外若不爲忤、中衡之」も含めて、細部の文言に至るまで一致點は多く、『太平廣記』説話の『新唐書』に對する影響關係は確實である。しかしただ一點注意を要するのは、この卷二六五は『太平廣記』(中華書局一九六一年初版)の巻首の校點者汪紹楹の識語(二〇六九頁)に、「本卷原欠、談(愷)氏初印

〔杜甫嚴武反目説話〕の構造(松原)

本有此卷。不知據何本補入。……故文末不註出處」とあるように、この説話の出典が確認されていないことである。このため、この『太平廣記』説話が、『太平廣記』成書(北宋最初期)以前の成立であるとは、嚴密には保證されないことである。『新唐書』「杜甫傳」の資料來源に關わるこの問題は、別途、確認する必要がある。

*……甫避走三川、會嚴武節度劍南、往依焉。武以世舊、待甫甚善、親至其家。甫見之、或時不巾、而性褊躁傲誕、嘗醉登武牀、瞻視曰：「嚴挺之乃有此兒！」武亦暴猛、外若不爲忤、中衡之。好論天下大事、高而不切。然數嘗寇亂、挺節無所汚；爲詩歌、情不忘君。人憐其忠云。